雪の時間

楊楚豪

二十年前
雪が降り積もっていた
私は滑り台の下に立.ていた
厚着をした体が、冷気を感じて
両親の笑い声が、家の中で響き渡っていた

滑り台の頂上で、私はただひとつの挑戦を前にしていた
目の前の雪景色が心に積もっていく
雪は白く、広がる空に溶け込んで
私を包み込んでいた

滑り台を滑り降り
風が肌を刺し
雪の上で派手に転んだ
この瞬間が、記憶の中で
生き続ける

百年後を考える
未来の雪はどうなるだろうか
この街が、冷たく、変わらずに残るのか
消えていくのか、誰にもわからない

今、私が立つこの場所も
過去の記憶と未来の夢が交錯する